



映画とアコと音楽と ⑤

『パリの屋根の下』 原題：Sous les toits de Paris

監督：ルネ・クレール 1930年公開のフランス映画（日本での公開は1931年）

パリの街並みを映しながら（実は全てセットだとか）冒頭から微かに聞こえてくる歌声。次第にアコーディオンの音色も聞き取れるようになり、人々が輪になり歌っている場面が映し出されます。主人公のアルベールが「街角うたごえ」という感じで商売をしているのですが、彼が歌の合間に観客の側へ行き歌詞カードを売っている間には、アコーディオン伴奏者のソロ演奏もあります。何度も繰り返して歌っているうちに、この曲「パリの屋根の下」は多くの人たちの耳に残り、散り散りになり各々の日常に戻った後も人々は自然とこのメロディーを口ずさむようになってゆきます。

映画の中盤、BAL（ダンスホール）の場面でもアコーディオンの音色が響いています。アルベールが魅力的な女性ポーラと結ばれることになり「結婚するぞ！」と喜ぶ場面では、アコーディオンの独奏で「結婚行進曲」が流れます。しかし、その後、無実の罪でアルベールが投獄されてしまい、その間「街角うたごえ」は開けず、視覚障害者らしいアコーディオン奏者の男性は一人で街角でアコーディオンを奏でています。そして、ポーラはアルベールの不在の間に友人のルイへと心移してしまうのです。少々切ない結末を迎える失恋ストーリーですが、決して後味は悪くなく、楽しく見終えることができます。「バル・ミュゼット」全盛期

の雰囲気はこんな風だったのだろうと感じさせてくれる、ミュゼット好きには嬉しい音楽があふれる映画です。

私が初めてこの映画を見たのは40年も昔のことです。東京で一人暮らしを始め、大学の授業のない時に名画座で2本立ての古い映画を見る楽しみを覚えた頃でした。この時期には、まだアコーディオンには全く関心もなく、只々この映画と、そして同時上映されていた「パリ祭」の音楽が、とても魅力的なものとして心に残りました。時を経て、自分がアコーディオンを弾くようになり「映画とアコと音楽」というテーマを目にした時に、真っ先に頭に思い浮かんだのが、この「パリの屋根の下」でした。今回、随分と久しぶりにDVDで見ましたが、大変懐かしく青春時代に戻ったような気持ちになりました。ひととき10代の少女に若返ったようでした。 《工藤 絵里》



絵 藤森 悠治 作（洋画家）サンジェルマンデプレ ※記事とは関係ありません。

♪「山路浅子 アコーディオンスタンダード名曲選」ぶらり訪問記♪

2018年7月28日(土) 14:00 開演 ミューザ川崎 音楽工房市民交流室

当日は、台風12号が東海か近畿、四国に上陸する見込みという予報でした。開演時刻にはまだ薄日が射していたのですが、終了後の15:00過ぎには風雨共に台風の影響が出ていました。



さて、山路浅子さんの独奏は、平山教室の発表会で聴くことはあったけれども、ソロのコンサートとしては初めてで楽しみにしていました。前半最

初の演奏は“Marinella”という映画の主題歌で「マリネラ」、明るい軽快な曲で始まりました。ルンバのリズムとの紹介でした。

2曲目は、タンゴの曲をと「小さな喫茶店」を演奏。バリエーションがきれいな編曲でした。3曲目の曲は「港が見える丘」(東辰三作詞・作曲/♪あなたと二人できた丘は 港が見える丘〜) 戦後間もない昭和22年(筆者が生まれた年)に歌われた歌謡曲です。演奏者は、今回の演奏会に向けて調べるまでずっと横浜市のうただとっていたそうです。次の曲「水色のワルツ」も昭和25年に歌われた曲です。当時このような洒落た曲があったのかと思うくらい大変きれいな曲です。感情を込めてしっとりうたわれる曲なので重音を使うなど工夫されていたけれども演奏は難しそうです。次の曲は「黄昏のビギン」曲の紹介で、この曲が歌われたのは昭和35年ですが、演奏者がこの歌を知ったきっかけはコーヒーのCMで、ちあきなおみさんが歌っているものだったと語っていました。

前半のプログラムでは、6つのリズムを用意することに決めていて、曲は何にしようかと考えたときに、「歌詞が美しい曲」そして「楽しい曲」というテーマで選んだとおっしゃっていました。そこで次(第1部最後の曲)

は楽しい曲ということで「朝はどこから」を選ばれたそうです。昭和21年の曲なので馴染みのない方もいらっしゃるかもしれませんが是非覚えて帰って欲しいと、プログラムに載せてある歌詞を見ながらず、知っている方で1番を歌い、その後再度1番から3番まで一緒にうたいました。しっかり歌えていたので皆さんご存じだったようです。

(ここで10分休憩)

後半はクラシックコーナーで、最初の曲は「剣の舞」2曲目は「軽騎兵序曲」、そしてエルネスト・レクオーナ/スペイン組曲「アンダルシア」「マラゲーニャ」と続きます。中でも「マラゲーニャ」は5分程度の曲ですが、筆者にはとても難解な曲に思えました。

独奏最後の曲はフランツ・リスト/「ハンガリー狂詩曲第2番」、アルペジオや重音の連続で、今日の中では1番演奏時間も長く10分近い曲だったと思います。1人オーケストラの醍醐味を味わっているようでしたがこれもまた難しい曲です。

進行は演奏者自身が曲の解説をしながら進めます。簡単なちょっとした解説だけでも、声もはっきり良く通る落ち着いた語りは聴いている方も肩の力が取れてとても良かったです。椅子に座っての解説ですが、演奏は立奏ですべて暗譜です。筆者などはそれだけで尊敬しちゃいます。

最後はまた皆さんと楽しく歌いたいと「椰子の実」を会場の皆さんで歌い幕となりました。※写真は主催者より提供 (記:乙津)



♪「ともしびアコーディオン合奏講座 サマー・コンサート 2018」ぶらり訪問記♪

2018年7月29日(日) 14:00 開演 新宿文化センター小ホール

オープニングは全員合奏。曲はハイドン／「びっくりシンフォニーより」でした。同じメンバーで「水色のワルツ」(丘ひろこ編曲)と2曲続けてのやわらかいぬくもりのある演奏で、「ともしびアコーディオン合奏講座」の世界へ引き込まれていきます。

合奏講座の発足は1946年、今年で42年。メンバーも入れ替わっていく中で、昨年12月に仲間になられた一番新しい方が紹介され、司会者から入るきっかけは何かと聞かれた彼は「歌は歌っていたんだけど、楽器が何かできるとやりたいことが広がると思った。で、「歌声といえばアコーディオンでしょう」と思った」と答えていました。

続いては、ハードルの高い編曲を選んだけれども、少しずつ形になっていくのが楽しかったと、男性7人、女性2人の小編成で「荒城の月」を演奏。続く独奏の2曲目は「イルバーチョ(接吻)」と色っぽい曲名なのでどんな曲なんだろうと思って聴いていたけれども、情熱的なメロディーというよりは初恋の淡い感情の様でした。良く練習されたのでしょうやさしく流れるメロディーが耳に残ります。

続いては「うたごえコーナー」です。なぜうたごえコーナーをプログラムに入れたのが良くわかのので、司会のコメントを紹介します。

「アコーディオンを始めるきっかけは、8割以上の方がうたの伴奏をしてみたいと思われているようなので、今でも年に数回、アコーディオン合奏講座の中で最終練習日に“伴奏講座”をやるんです。(一人一人が前に出て両手で伴奏をして、みんなはそれに合わせて歌う)すらすらとそれができるようになったらいいなという夢をみんな持って練習をしています。なので、今日はそれをやってみようということで講師がサポートに入って講座生が一人1曲ずつ演奏します」ということで、会場を明るくして「山のロザリア」と「北上夜曲」を歌いました。(伴奏にはピアノも入りま

す)「山のロザリア」を伴奏された方はバイカル湖のほとりで「バイカル湖のほとり」を演奏したいと個人レッスンを受けるようになりその夢を実現されたと紹介されて会場からは(ほおー)と言った声が上がりました。

第1部の最後は小編成を二つ。1組目は「黒いオルフェ」を3人のアコーディオンで演奏。2組目はピアノと2台のアコーディオンで「古いロシアのワルツ」を演奏。

・・・・・・15分休憩・・・・・・

第2部は講座の特別講師、土生英彦氏の「ゲスト演奏」、曲は「バダロナ」「ナポリタン セレナーデ」他、計4曲を続けて演奏。流れるような演奏に客席も大きな拍手で応えていました。

続いては女性7名の小編成で、曲は「ケセラセラ」と他1曲演奏。最初の「ケセラセラ」は単に楽観的というよりは、めげずに正しい道を歩む努力をすればいつか良い日が来るという意味にとらえて演奏しますと紹介。

そして、ともしび合唱団の皆さんによる友情出演では、ともしびで歌い継がれてきたうたと「大地讃頌」、筆者の子どもたちも中学校で盛んに歌っていた曲です。

2回目の「うたごえコーナー」では、ともしび合唱団の皆さんも客席へ降りて一緒にうたいます。ここでも1人1曲ずつ歌伴の実践です。曲は「山小屋の灯」「みかんの花咲く丘」そして「乾杯の歌」の3曲でした。

第2部の最後は全員合奏を3曲。1曲目はモーツァルト「交響曲第39番 変ホ長調 第3楽章より」、2曲目は「碧空」、最後は「アムール河の波」アンコールは、「ともしび」をお客さんと一緒にうたい幕を降ろしました。ともしびらしいさっぱいのコンサートでした。

写真は主催者提供。 (記:乙津)

